

小学校 5 年生の児童を対象とした ソーシャルスキルトレーニングの効果の検討 (2)

○滋野井 圓 (金沢工業大学大学院)
川畑良裕 井 (石川県立中央病院患者総合支援センター)

石川健介 (金沢工業大学)
西田有希 (こども総合相談センター)

キーワード: SST, 学級単位, 小学生

目 的

子どもの社会的適応を援助するためのアプローチの一つとして、学級単位でのソーシャルスキルトレーニング (Class-Wide Social Skills Training: 以下, CSST とする) がある。CSST などの集団で実施する SST の利点の一つとして、一度に多くの児童を訓練対象にでき、効率性に優れていることがあげられる。滋野井 (2017) において実施された CSST では、自己評定尺度や他者評定尺度の結果から、プログラムの効果が学級全体として認められたが、その効果がソーシャルスキルが不足している児童にも有効であったか検討する必要があると思われる。本研究では、プログラム開始前に学級の中で質問紙の得点が低かった児童 (以下、低得点児とする) をソーシャルスキルが不足しているものとし、プログラムを経て質問紙の得点がどのように変化したか、検討した。

方 法

対象児の選定方法 アセスメントに用いた「お友だち付き合いに関するアンケート」の自己評定尺度と、教師評定尺度の合計得点の両方が学級の下位 1/3 となった児童を対象とした。

対象児 プログラムに参加した小学 5 年生 3 学級 92 名の児童のうち、12 名が低得点児となった。

プログラムの内容 事前に実施した質問紙の結果をもとに標的行動を決め、以下の 4 回のセッションで各標的行動を指導した。第 1 回「キレイな方法を身につけよう」、第 2 回「上手な頼み方、断り方を身につけよう」、第 3 回「友だちを励ます方法を身につけよう」、第 4 回「誰かに相談する方法を身につけよう」であった。

アセスメント 秋田 (2001)「お友だち付き合いに関するアンケート」をもとに自己評定尺度 (31 項目 4 件法)、教師評定尺度 (31 項目選択式)、仲間評定尺度 (8 項目選択式) を作成した。自己評定尺度はプログラムの前後を含め計 5 回、教師評定尺度と仲間評定尺度は全学級第 2 回査定と各学級のプログラム後の計 2 回実施した。

結果と考察

CSST プログラム実施前後における低得点児の自己評定尺度、教師評定尺度、仲間評定尺度の変化について検討を行った。Table 1 には、第 1 回査定の学年全体の結果に基づいて標準化した得点を示した (平均値 50, 標準偏差 10)。自己評定尺度得点について、全ての学級において、本プログラムの導入後に得点の上昇がみられた。フォローアップが可能であった A 組と B 組において、両方の学級でプログラム終了後も得点が上昇していた。

教師評定尺度 (Table 2) について、本プログラムの導入後に A 組と C 組において得点が上昇、B 組において得点が減少していた。B 組を除けば、担任教師らがベースライン査定で「スキルが不足している」と感じていた児童らに対して、効果的なプログラムが実施出来たと言えるだろう。仲間評定尺度 (Table 2) についても、本プログラムの導入後に A 組と C 組において得点が上昇、B 組において得点が減少していた。B 組を除けば、児童らの間でもスキルの向上が認められた可能性が示唆された。

このことから、低得点児にも、本プログラムによって社会的スキルを向上させる効果があったと思われる。

Table 1 自己評定尺度得点の変化

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回
A 組	33.0	35.0	39.0	42.8	43.8
B 組	38.9	42.8	35.0	37.1	37.6
C 組	45.6	44.8	42.0	40.5	43.5

※網掛けはプログラム導入後の値

Table 2 教師評定尺度得点、仲間評定尺度得点の変化

	教師評定尺度得点		仲間評定尺度得点	
	Pre	Post	Pre	Post
A 組	-5.8	-4.7	37.7	47.0
B 組	1.8	1.0	34.7	27.8
C 組	1.5	10.5	54.0	67.5